

薬剤師の仕事は、 患者さんに薬を渡すまでではない

ファルメディコ株式会社 代表取締役社長
医師・医学博士 狭間研至 先生

はじめに

薬剤師の皆さんや薬学生の方にお話をさせていただく中でいつも感じるのは、薬剤師を取り巻く環境や今後の展望に対し、程度の差はありますが、多かれ少なかれ抱いている閉塞感です。薬剤師の社会的認知度、様々な待遇、仕事の内容や専門性に関する迷い、お客さんとの関係構築の難しさ、自分自身におけるやりがいの感じ方など、人それぞれではありますが、その悩みは決して浅くないように感じます。

その一方で、病院勤務でも薬局勤務でも、また、薬剤師、薬学生を問わず、さらには経営者であっても従業員であっても、ほとんどの方が感じている閉塞感の原因は、ただ一点にあるのではないかと思うようになってきました。

本稿では、外科医である私が薬局に帰り、14年余りが経過して見えてきた、本質的な問題点について考えてみます。

薬を渡すまでの仕事になっていませんか？

現在の薬剤師の仕事とは、一体どのようなものでしょうか。もちろん、様々な条件やバリエーション、さらには各職場や個人の事情があるとは思いますが、多くの場合において「医師が発行した処方箋を応需し、中身に疑義がないかどうかを確認する。もし、疑義があれば処方医に問い合わせ、正確・迅速に調剤し、分かりやすい服薬指導とともに患者さんにお薬を交付する。そして一連の出来事を薬歴に記載する」というのが、薬剤師の仕事のように考えられているのではないのでしょうか。

もちろん、これは大切な仕事です。薬剤師が処方箋の内容に不備や不具合がないかを見抜かない限り、安全な薬物治療が行われることはありません。また、正確に調剤することはもちろんのこと、特に薬局店頭ではある程度以上のスピード感をもって対応しなければ、患者さんに迷惑をかけてしまうことになります。さらに、服薬指導の内容は正しくかつ分かりやすくなくてはならず、その日の状

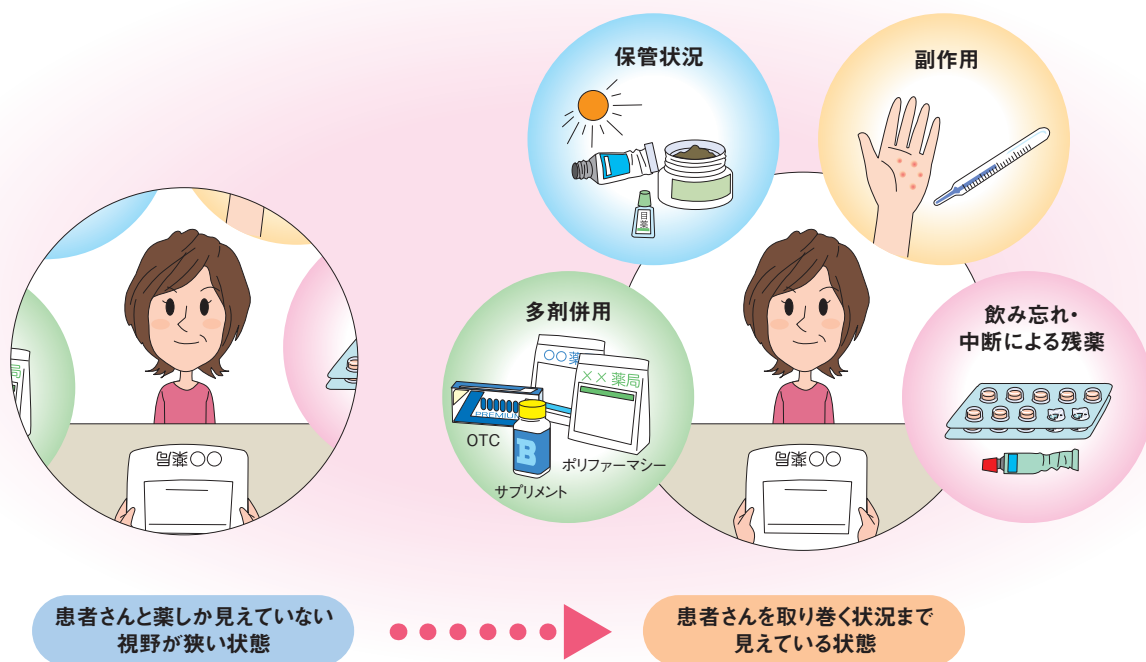
況や収集した情報を遅滞なく記載することは、適正な保険調剤業務を遂行する上で不可欠です。

しかし、これらの仕事を完璧にこなしても、今ひとつ充実感を感じられなかったり、ジレンマを消し去りにくかったりする方が、少なくないのが現状ではないでしょうか。私が運営する薬局や、理事長を務める一般社団法人日本在宅薬学会などにおいて、いろいろな薬剤師さんのお話を聞いていても、やはりこの閉塞感は広く浸透しているように感じます。

この閉塞感には以下の二つの理由があると、私自身は考えています。

一つは、機械化やICT化によって、薬剤師でなくても多くの業務が代替できるようになってきたことです。従来は、薬剤師でなければできなかった業務や、薬剤師でなくては知り得なかった情報が、確かに存在していました。しかし、この20年余りの間に状況は急速に変わりつつあります。もちろん、それは薬剤師だけに限った話ではありません。鉄道の駅の改札が自動化され、切符もICカードに変わったり、ガソリンスタンドのセルフ化が進んだり、周りの状況も大きく変わりつつあるのです。

もう一つは、薬を渡すまでの範囲では、薬剤師の専門性を明確にできなくなったことです。薬を正確に計り取ったり、どんな薬かを暗記していたりすることが、多少なりとも専門的な知識や技術を必要としたように見えた時期もあったでしょう。しかし、薬剤師が専門性の拠りどころとするのは、薬学教育の中で熱心に学び、手間暇かけて習得した薬理学、薬物動態学、製剤学といった知識ではないかと思うのです。これらを薬剤師が活用し、専門職でなければできない状況判断と、それに対して責任をとるということをしなければ、薬剤師が薬学部で学んだ意味すら怪しくなってしまいます。そして、よく考えてみると、これら専門的知識はいずれも、「薬が体に入った後にどうなるか」を考える上で必要なことであるのに対し、現在の薬剤師の業務は、「薬が体に入るまでのところ」に限局されているのです。



この二つの理由によって、薬剤師が自分の専門性について疑問を持つようになるだけでなく、医療チームに薬剤師が加わる必然性についても疑義が生じるようになってきているのではないかと、私は考えています。

● 薬剤師が薬を飲んだ後までフォローする

このジレンマや閉塞感を解放するためには、どうすればよいのでしょうか。私は「薬剤師が薬を飲んだ後までフォローすることに尽きる」と考えています。それには、以下の二つの理由があります。

一つは、薬剤師の専門性が生かせることです。先述のように、現在の業務において薬剤師の専門性は、理論的にも生かすことができません。なぜなら、薬を飲んだ前か後かで時間軸がはっきり分かれるからです。機械的に薬を準備したり注意事項を説明したりという作業は、文字通り機械やICTに取って代わられつつあります。しかし、服用後の状態を見れば、薬学部でしか学べない内容を活かせる状況が出現し、調剤した薬剤の服用後における状態変化の謎を、薬剤師でしかできない視点で解くことができ、薬剤師の専門性を自他ともに認められるようになります。

もう一つは、薬剤師が服用後の状況をフォローすることで、よりよい薬物治療が可能になることです。昨今、いろいろと話題になっている多剤併用、ポリファーマシー、残

薬の問題をクリアするためにも、薬剤師が服用後の状況を確認し、次回処方前に医師に伝えることで、よりよい薬物治療が行われるようサポートできるようになります。

それらによって、薬剤師の仕事がまさに、薬という「モノ」を扱う仕事から、患者さんという「ヒト」を扱う仕事へと変わっていくとともに、薬剤師がチーム医療の一員として有機的にほかの医療専門職とリンクしながら、主体的・積極的に患者さんとの関わりを深めていくことも可能になるのだと思います。

● おわりに

薬剤師が在宅に赴いたり、血圧や脈拍を測定したり、聴診器を使ったり、はたまた抗がん剤や特殊な薬を使ったりということだけで、薬剤師の何かが変わるわけではありません。大事なのは、薬剤師が従来の業務において、薬が体に入るまでの部分しか携わってこなかった現実を認識し、薬を飲んだ後までフォローして、より安心して安全な薬物治療が行われるようになることです。それにより結果的に、薬剤師が持つジレンマや閉塞感が解放されることになるのです。

ぜひ、あなたの患者さんもこのような観点で見直してみることをお勧めします。きっと、ご自身が感じられているジレンマが解放される感覚を、体験していただけたと思います。